

佐藤 正志 さん
前 巖美7区区長



平成20年から6年間区長を務めました。「岩手・宮城内陸地震」「東日本大震災」は自宅で経験。孫たちを抱えて家の外に逃げました。地区では電気と水道が止まり、家屋や道路にも大きな被害が出ました。地域住民と家族で協力し、なんとか乗り切りました。忘れられない記憶です。



佐藤正志さん(66) 宅は、妻恵美子さん(65)、長男の英樹さん(39)、長男妻の亜紀子(32)さん、巖美小に通う孫の和輝君(4年)、愛菜さん(3年)。巖美幼稚園に通う孫の淳輝ちゃん(5つ)、父の勇さん(85)、母のさつ子さん(82)の9人家族。防災マップを囲み、避難場所や非常持出品を確認しあつた

特集 災害に備える

公助は行き渡るのに時間がかかる。最低3日間(72時間)は生き残る備えを

3 日常の備えで、二次災害を阻止

安全は油断で奪われる

私たちが襲う災害は水害だけとは限りません。巖美町の風景を変えた「岩手・宮城内陸地震」や、今なお被害の爪あとが残る「東日本大震災」などの地震災害。そして、火災などの二次災害。
災害から私たちを守ってくれる消防団は、郷土愛の精神に支えられた住民組織。わが身の危険をかえりみず、消火活動や救出活動ができるのは、日ごろの厳しい訓練があればこそ。消防操法競技会や水防訓練は、地域の力で地域を守る機運の高まりが起源と言われています。
市の消防団員、婦人消防協力隊員、消防本部の分署員の合計はおよそ4500人。市の人口12万4千人に対し、消防関係者の割合は3.6%。自主防災組織や住民の防災活動がいかに大切かは一目瞭然です。大規模災害の発生時は、より被害の大きい現場に救助が集中します。公助に守られる暮らしから、自分で守る暮らしへ。今の私たちに必要なのは意識の改革です。

一関地区支部消防操法競技会は、一関東消防署訓練場で6月8日に開かれ、地域から選出された消防団員がポンプ車操法と小型ポンプ操法を実演。一関と平泉から参加した各9チームは、正確な規律動作と消防機器の操作を競い合いました。地域の災害現場で、日々活躍している団員らは、チームワークも良く、迫力のある掛け声と機敏な動作で、競技に取り組みました。

一関市水防訓練は、一関水辺プラザ交流ゾーンで7月6日に開かれ、消防団と自主防災組織から約500人が参加しました。訓練は大雨で堤防が決壊し、市内で大規模な災害が発生したことを想定。積み土のう工法などの被害を減らす訓練に取り組みました。婦人消防協力隊による炊き出し、県防災ヘリコプターによる迫力ある救助救出訓練も実演。参加者らは防災意識を一層高めました。

日常の備えで減災する

水害や地震災害を防ぐことはできません。しかし、備えることで被害を最小限にすることができまます。これを「減災」と言います。
いつ起こるか分からない自然災害を相手に、私たちができる備えとは何でしょう。
飲料水、非常食品、懐中電灯、ラジオ、応急医薬品などの非常持ち出し品の準備だけでは、万全とは言えません。
どこに避難するかを申し合わせたり、安否確認の方法を確認したりと、日常から家庭内で防災を意識することが最大の備えになります。
家は生活する場であると同時に、家族を守る場所。過去の記録と記憶を子供たちに伝えることも大切です。



チェックノートは防災への備えがまとめられた便利な一冊(※2)

非常持出品一覧

- 【1次持出品】災害直後の避難時に必要なもの。飲料水は脱水症状を防ぐためにも必須。現金は小銭を多く準備すると自動販売機などで困らない。予備の電池も忘れずに。
 - 【2次持出品】避難後、落ち着いたら家に戻って持ち出すもの。屋内に避難できる確証はない。数日間は雨や雪、寒さをしのげるように準備しておく安心。
- | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------------------|-------------|-------|------|-----|--------|----------|--------|-------|------|------|------|----|-------|-----|----------|-----|----|
| ①飲料水(1日1人3ℓ、最低3日分) | ②非常食(最低3日分) | ③懐中電灯 | ④ラジオ | ⑤現金 | ⑥応急医薬品 | ⑦常備薬・持病薬 | ⑧ヘルメット | ⑨スリッパ | ⑩マスク | ⑪タオル | ⑫ナイフ | ⑬笛 | ⑭携帯電話 | ⑮雨具 | ⑯使い捨てカイロ | ⑰軍手 | など |
|--------------------|-------------|-------|------|-----|--------|----------|--------|-------|------|------|------|----|-------|-----|----------|-----|----|



非常持出品はリュックザックなどにまとめて用意しておく便利

生存への壁72時間

災害発生から72時間経過すると、生存率が急激に低下すると言われています。防衛省・自衛隊の発行する「防衛白書(平成24年版)」によれば、先の東日本大震災における自衛隊の救助人数は1万9千人余り。うち震災発生当日(24時間以内)に救助された人の数は8202人。翌日(48時間以内)は6362人。3日目(72時間以内)は3944人。4日目は465人。5日目は203人。6日目は77人。7日目は26人。4日目から救助された人の数が大きく減っていることがわかります。
原因の一つは脱水症状で、天候や被害の状態によっては、さらに厳しい状態に置かれる可能性も考えられます。
生存への壁、72時間をどうやって乗り越えるのか。答えは「備える」ことに集約されるでしょう。今、何を準備すべきか。そのとき、何をすべきなのか。私たちが経験した災害の記憶から、未来への教訓を導き出すことが求められています。

消防操法競技会



高橋 栄治 さん
一関市消防団 東山 第3分団
自主防災組織と連携した活動が必要

昨年、松川地域は水害で甚大な被害を受けた。団員には迅速な対応が求められている、勤務時間や場所の制約で練習時間は限られている。地域の自主防災組織とともに災害に備えたい。



水防訓練

遊佐 芳國 さん
川崎町高成自治会長
一人一人が危険な場所を理解するべき

水防訓練には、毎年、緊張感をもって参加している。高成地域の周辺には急傾斜地が多く、大雨の時は沢水が増水する。学習会や訓練を通じて、一人一人に危険な場所や状況を周知したい。

